

友達と共通の目的に向かって協働する幼児を育む

もめごとを幼児一人一人に応じた良質な刺激に変える教師の関わり

特別研修員 幼児教育 関川 香里（幼稚園教諭）

幼児の実態（3年保育5歳児）

○友達と遊ぶ楽しさを感じているが、思いの違いやルールを守らないことで「もめごと」が起こる。このような場面で、押す、叩く、その場を離れるなどの行動を通して気持ちを表現する。

教師の願い

○友達と考えやイメージを共有し、自分たちで遊びを作り出す楽しさを味わってほしい。
○友達と共通の目的に向かって、一緒に考え問題を解決したり、協力して自分たちの力で進めたりするようになってほしい。

手立て もめごとを幼児一人一人に応じた良質な刺激に変える教師の関わり



幼児が安心して自分らしくいるための教師の関わり(ア)

友達とやりたいことが生まれるような状況づくり(イ)

体験(学び)を意識化できるような言葉掛け(ウ)

自分自身で行動を決めて動き出せるような援助(エ)

幼児の気持ちを揺さぶるような直接的・間接的な援助と、自分の気持ちと向き合う時間の保障(オ)

お店屋さんづくりをするA児と他のことで遊ぶB児、C児、D児たちの間で、使う物の貸し借りについてもめている場面

A児は、イメージを形にしたり、実現したりする力をもっているが、友達と関わる中では、「こうしたい」という思いが強く、相手の思いに気付いて、相手の立場になって考えることが課題である。そのためA児には、自分がやりたいことを楽しみ遊ぶ中で、友達と関わったり、友達のよさや思いを感じたりしてほしいという願いを教師がもっている。

①A児と友達の主張がぶつかり合う場面

A児：「お店をつくるのに、もっと段ボールが使いたいんだよ。16個使いたい。」
B児：「ぼくたちも使ってるよ。それだとなくなっちゃうよ。」
C児はを見上げ、方法はないか考えているように見える。
教師は幼児が考える前に提案してしまいそうだが、手立て(エ・オ)から「どうしても貸せないならそう言ってもいいかな?」と、言葉を掛ける。



②A児が友達に思いを受け止めてもらう場面

しばらく考えていたC児が、何か思いついたように、B児とD児に相談し始める。そして、B児とD児は貸すことのできる段ボールを持ってくる。
D児：「使っていいよ。」
教師は「自分たちも使いたいのに優しいね」と、言葉を掛けてしまいそうだが、手立(ア・オ)から「どうしても貸せないならそう言ってもいいんだよ」と、言葉を掛ける。



③A児が自分の思いを友達に尊重してもらったことを感じる場面

C児：「これを使うから大丈夫。」
A児はC児の姿を黙ったまま見ているが、表情が晴れたように見える。
教師はB児、C児、D児たちを認める言葉掛けばかりしてしまいそうだが、手立て(ウ)から「よかったね。こんな方法があったんだね」と、全員に言葉を掛ける。



④A児が、友達の話を知っている場面

C児：「貸してあげるってことは、優しいことなんだよ。」
教師は友達の思いを受け止めるだけが良いこととは思えない。この場面に限らず、どの幼児にも、誰かが我慢するのではなく、一人一人が納得して次に進んでほしいと考える。そのため、どのような言葉を掛けたらよいのか悩みながら「どうしても使いたいときは、貸せないって言うっていいんだよ」と、言葉を掛ける。(ア・ウ)



A児に育まれている『人と関わる力』の基礎となる資質・能力

一人一人の思いが大切にされる安心感

友達の思いを感じる

自分の思いを受け止めてもらう喜びを味わう

友達の優しさに触れる

友達と落としどころを見付け、互いによりよい解決方法を考えることの大切さを感じる

このような経験を重ね、幼児一人一人の資質・能力が育まれることで

A児は、自分の思いを実現するように遊ぶ日が続いたが、友達がペープサートを始めると、仲間に加わった。A児は友達の話聞きながら椅子を並べたり、「お客さん呼んでくるよ」と言葉を掛けたりした。そして、友達にペープサートを始められるか確認すると、それを客にも伝え、一緒に遊びを進めた。

自分の「やりたい」という思いだけで遊ぶA児だったが、友達とやりたいこと(目的)が生まれると、思いを共有し、一緒に実現しようとする様子が捉えられた。



成果

「もめごと」を幼児一人一人に応じた良質な刺激に変える教師の関わりから、幼児の心は揺り動かされ、言葉にならないもやもやとした感情やそれが晴れたときの感情など、様々な感情を味わえた。そして、葛藤しながら自身で行動を決めることで、自分の意志で行動する「主体性」や感情をコントロールする「自制心」、友達の気持ちを思い描く「想像力」、友達の感情を共有し心を通わせる「共感性」などを育むことができた。そして、友達と共通の目的をもつようになると、それに向かって協働して遊びを進めるようになっていった。

課題

実践から、幼児一人一人に応じた教師が関わる大切である。同時に、発達や内面など目に見えないものを推測して幼児の姿を読み取ることや、瞬時に適切な援助をすることが大切である。今後も幼児の姿を多面的に読み取ることや、幼児一人一人に応じた援助を模索することで、教師自身の視野を広げていく必要がある。